

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：32621

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730582

研究課題名(和文)コンドームの購入および使用の促進を目指した羞恥感情低減プログラムの開発と効果検証

研究課題名(英文)The effects of internet-based training for reducing embarrassment when purchasing / using condoms

研究代表者

樋口 匡貴 (HIGUCHI, Masataka)

上智大学・総合人間科学部・准教授

研究者番号：60352093

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：コンドームの適切な使用を阻害する羞恥感情を低減するための介入プログラムについて、購入状況と使用・使用交渉状況に大別して検討を行った。購入時に関する検討の結果、インターネット上でVTRを閲覧させる介入プログラムの羞恥感情低減効果およびコンドーム購入の自己効力感の増加効果が確認された。また使用・使用交渉時に関する検討の結果、ウェブサイトでのインタラクティブな介入プログラムの羞恥感情低減効果が確認された。

研究成果の概要(英文)：This study was to investigate the effects of new internet-based interventions that mainly aimed to reduce embarrassment when purchasing / using condoms. As a result, our video-feedback training succeeded in reducing embarrassment and improving self efficacy when purchasing condoms. Moreover, our interactive intervention on web site succeeded in reducing embarrassment when using / negotiating to use condoms.

研究分野：社会科学

キーワード：エイズ予防 コンドーム使用 コンドーム購入 羞恥感情

1. 研究開始当初の背景

(1) HIV 問題の深刻性と対策

HIV (ヒト免疫不全ウイルス) 問題は、近年の日本にとって非常に重要な課題である。厚生労働省エイズ動向委員会報告によると、2010 年末までに報告された HIV 感染者および AIDS 患者の累計は 18,447 名であり、年々増加傾向にある。感染経路が性的接触である場合が報告者数の 80% を超えており、また報告者のうち 70% が 20 ~ 30 歳代である。HIV および AIDS を完全に消失・治癒させる医学・薬学的な手段は存在せず、感染の予防こそが重要である。

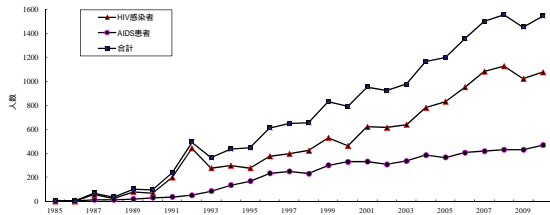


図1 HIV感染者およびAIDS患者の年次推移

HIV 感染予防にとって現実的かつ効果的な対策はコンドームの適切な使用に他ならず、20 ~ 30 歳代までに徹底させる必要がある。厚生労働省による「後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針」において、青少年は、特別の配慮を必要とする個別施策層に位置づけられている。しかし今日の現状は有効な予防介入プログラムの不足を裏付けており、コンドーム使用の促進を目指した本研究課題は、疫学的にも学術的にも促進すべき喫緊の研究課題である。

(2) コンドーム使用と羞恥感情

コンドーム使用に関する心理学的研究では、自己効力感や規範意識、HIV に関する知識など、コンドーム使用を規定する様々な要因が検討されてきた (Peterson & DiClemente, 2000: *Handbook of HIV Prevention*)。中でも近年注目を集めている重要な阻害要因が羞恥感情である。

羞恥感情 (embarrassment) は、特にコンドームの購入および使用時に生じ、これらの行動を強く阻害することが指摘されてきた (e.g., Moore, et al., 2006: *Psychology, Health & Medicine*, **11**, 70-79.)。過去の研究では、羞恥感情を低減させ購入や使用を促進させるための介入方法は検討されてはきたものの (Weiss, et al., 1995: *AIDS Education and Prevention*, **7**, 50-59.)、持続的で十分な低減効果を持つプログラムは未だ存在しなかった。

検討されてきた羞恥感情低減プログラムの効果が不十分な理由として、コンドーム購入時や使用時の羞恥感情がなぜ生じるのかという認知的な発生因が考慮されていない点が指摘できる。すなわち、他者の目を気にして恥ずかしがっている場合と、自分らしく

ないふるまいだと思うことで恥ずかしがっている場合とでは、当然介入すべきポイントは異なるはずである。しかし過去に行われた介入方法に関する検討では、この点を全く考慮に入れていなかった。

(3) これまでの研究実施状況

研究代表者らは第1段階の検討として、コンドーム購入時に生じる羞恥感情とその認知的発生因が購入に及ぼす影響 (樋口・中村, 2009, *社会心理学研究*, **25**, 61-69.)、コンドーム使用・使用交渉時に生じる羞恥感情とその発生因が使用・使用交渉に及ぼす影響 (樋口・中村, 2010, *社会心理学研究*, **26**, 151-157.) についての検討を行った。これらの検討から得られた知見は以下の3点に整理できる。羞恥感情はコンドーム購入および使用・使用交渉行動を阻害する極めて重要な要因である ($r = -.41 \sim -.80$)。コンドーム購入時の羞恥感情は、購入時の行動指針の不明瞭さ (例: どう振る舞うべきかわからない) が原因となって発生する。コンドーム使用・使用交渉時の羞恥感情は、男性においてはパートナーからの評価への懸念が、女性においては行動指針の不明瞭さが原因となって発生する。

さらに研究代表者らはこれらの結果を受けた第2段階の検討として、コンドーム購入時の羞恥感情を低減させ、コンドーム購入を促進させるための介入プログラムの開発に着手した (樋口・中村, 2010, *日本エイズ学会誌*, **12**, 110-118)。具体的には、購入時の羞恥感情を低減させるための映像を用いた介入プログラムを作成し、その効果に関する予備的検討としてシングルケースデザインによる実験を行った。その結果、映像を用いた介入プログラムには、介入直後ならびに1ヶ月の時間経過後において、コンドーム購入行動意図の上昇、購入時の羞恥感情の低減、自己効力感の増加に効果があることを確認した。

2. 研究の目的

本研究は、研究代表者らがこれまでに行ってきた研究の成果をさらに発展させたものである。すなわちコンドーム購入および使用時に生じる羞恥感情を低減させ、コンドーム購入および使用を促進させるための介入プログラムを開発し、その効果を明らかにすることが目的であった。

具体的には以下3点であった。

- (1) 実施済のコンドーム購入に関する第2段階の検討を受け、コンドーム購入時の羞恥感情を低減させるための介入プログラムの効果を検討すること
- (2) コンドーム使用時の羞恥感情を低減させるための介入プログラムの開発と予備的な検討を行うこと
- (3) コンドーム使用時の羞恥感情を低減させるための介入プログラムの効果の検

討を行うこと

なお HIV 感染の拡大状況を鑑みると、介入プログラムはなるべく多数の対象に容易に実施できる形態が望ましい。そのため介入プログラムは映像を用いることとし、介入プログラムの効果の検討はインターネット上の公開を前提として行うこととした。

3. 研究の方法

(1) 研究1: 映像を用いたコンドーム購入時の羞恥感情低減プログラムの効果の検討

研究代表者らのこれまでの研究によって、コンドーム購入時の羞恥感情を低め購入行動意図を高めるには、恥ずかしそうにコンドームを購入する人物、堂々とコンドームを購入する人物のそれぞれの映像の提示が有効であることがシングルケースデザインの研究によって示されていた。この手法は認知行動療法におけるビデオフィードバック法の応用である。そこでこれらの内容を含む映像をウェブページ上にて提示し、効果を無作為比較試験によって検証した。

20~25歳の成人男女643名を対象にした3群無作為事前事後計画による介入実験を行った。性別およびコンドーム使用経験を考慮した層化無作為法によって実験参加者をビデオ介入群(上記内容のビデオを視聴させる)、知識介入群(コンドームに関する知識を提供するパンフレット画像を視聴させる)、統制群(何も視聴させない)のいずれかに割り付けた。事前測定の約2週間後に介入および直後測定を行い、介入の約1か月後にフォローアップ測定を行った。測定した主な指標は、コンドーム購入時の羞恥感情、羞恥感情の認知的発生因、コンドーム購入に関する自己効力感、コンドーム購入行動意図などであった。これらの手続きは、いずれもインターネット上のウェブページにて実施した。

(2) 研究2: 映像を用いたコンドーム使用時の羞恥感情低減プログラムの開発

研究代表者らのこれまでの研究によって、コンドーム使用時の羞恥感情は男性においては評価への懸念が、女性においては行動指針の不明瞭さが原因となって発生することが明らかになっている。さらにこれらの変数は、「愛情提示の失敗懸念」(愛していないと思われるのではないかと)、 「使用・提案方法の不明瞭さ」(どうやって使おうと言えいいかわからない)、 「使用拒否懸念」(嫌だと言われるかもしれない)、 「雰囲気崩壊の懸念」(雰囲気が壊れるのではないかと) といった背景思考との関連が示唆されている。

そこで研究2として、心理学研究者3名を対象とした面接調査により、重要な背景思考の選出およびそれに対する反論思考の選出を行った。

(3) 研究3: コンドーム使用時の羞恥感情を

低減させる介入プログラムの効果研究

研究2までの段階によって、コンドーム使用時の羞恥感情は男性においては評価への懸念が、女性においては行動指針の不明瞭さが原因となって発生することが明らかになっていた。さらにこれらの変数に対しては、「相手に嫌われてしまうのではないかと」といったコンドーム使用時の背景思考が重要であることが示されてきた。そこで研究3で背景思考に対する反駁情報を提示するウェブサイト上で作動するプログラムを作成し、このプログラムの効果を検討することを目的とした。

本研究で作成したプログラムでは、まず「コンドームを使う時、あなたはこんな風に思ってしまうことはありませんか? 思ってしまうものを選択しよう」という文章のもと、「1. コンドームを使うと相手に嫌われてしまうかも」といった4つの背景思考が提示される。このうちどれかを選ぶと、その思考に対する実際の調査データに基づいた反駁情報(例「コンドームを使う相手のことを嫌いになることはないとしている女性はなんと94%!」)が提示される仕組みになっている。

20~25歳の成人322名を対象にしたインターネット調査により、本プログラムの効果を検討した。ランダムに振り分けられた152名(介入群)に対してこのウェブサイトを見せ、見なかった残りの170名(対照群)との比較を行った。

4. 研究成果

(1) 研究1: 映像を用いたコンドーム購入時の羞恥感情低減プログラムの効果の検討

実験の結果、ビデオを用いた介入の有効性が各種の指標において明らかとなった。特に介入直後の羞恥感情低減効果、そして介入直後ならびに1か月後のコンドーム購入の自己効力感の増加効果についてはきわめて顕著なものであった。

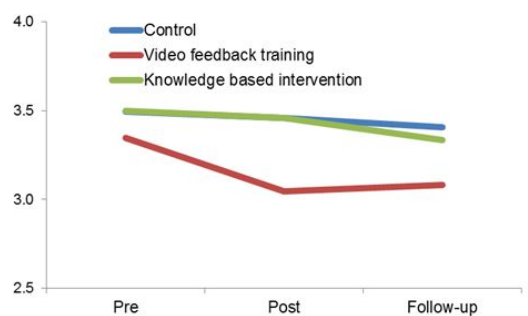


Fig.. The scores of embarrassment in each condition.

(2) 研究2: コンドーム使用時の羞恥感情低減プログラムの開発

面接調査の結果、コンドーム使用を阻害するコンドーム使用時の背景思考の中で特に重要なものとして、「相手に嫌われてしまうのではないかと」「セックスをつまらなくする

のではないか」「自分是不慣れである」「使用・提案方法の不明瞭さ」の4点が選出された。

(3) 研究3: コンドーム使用時の羞恥感情を低減させる介入プログラムの効果研究

事前および閲覧直後にはコンドーム使用時の羞恥感情の得点に群間で差がなかったが、閲覧2週間後には介入群の羞恥感情の得点が対照群に比べて有意に低かった。しかし自己効力感およびコンドーム使用行動意図の得点に関しては、プログラム閲覧の効果はみられなかった。すなわち本プログラムは羞恥感情の低下に対しては有効であることが示された一方で、自己効力感や行動への影響は確認できなかった。

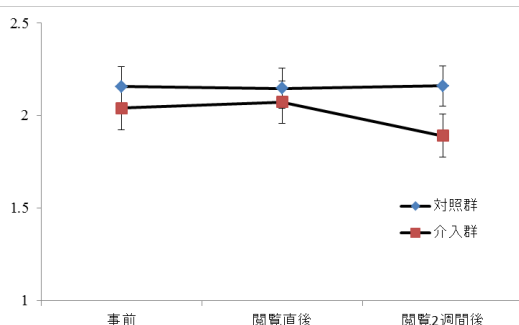


Fig. 各条件における羞恥感情得点の推移 (エラーバーは標準誤差)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計7件)

Higuchi, M. & Nakamura, N. (2014). Effects of internet-based video-feedback training for reducing embarrassment when purchasing condoms: Two month follow-up of a randomized trial. 28th International Congress of Applied Psychology, 2014/07/10, Paris (France).

樋口匡貴・鷹野宣章・福田哲也 (2014). 羞恥の表出は信頼の獲得につながるか(2) 羞恥表出による集団間バイアス 是正効果の検討 日本社会心理学会第55回大会, 2014/07/27, 北海道大学(北海道札幌市).

Higuchi, M. & Nakamura, N. (2013). Effects of internet-based video-feedback training for reducing embarrassment when purchasing condoms. The 13th European Congress of Psychology, 2013/07/12, Stockholm (Sweden).

樋口匡貴・福田哲也・蔵永 瞳 (2013). 羞恥の表出は信頼の獲得につながるか? Feinberg, et al. (2012)の追試的検討 日本社会心理学会第54回大会, 2013/11/03, 沖縄国際大学(沖縄県那覇市).

樋口匡貴・中村菜々子 (2012). コンドーム使用促進に関する心理学的研究(15) VTRを使用したコンドーム購入集団トレーニングの効果 第26回日本エイズ学会学術集会・総会, 2012/11/26, 慶應義塾大学日吉キャンパス(神奈川県横浜市).

Higuchi, M., Nakamura, N., Kuranaga, H., & Teruya, Y. (2012). Cause and effect of embarrassment related to breast cancer screening in Japan. 30th International Congress of Psychology, 2012/07/25, Cape Town (South Africa).

樋口匡貴・中村菜々子 (2012). コンドーム購入・使用行動を阻害する羞恥感情の研究, 2012 Japan Conference @ Academia Sinica. 2012/05/04, Taipei (Taiwan).

[図書](計1件)

樋口匡貴・中村菜々子 (2014). コンドーム購入行動を阻害する羞恥感情の研究 VTRを使用したコンドーム購入集団トレーニングの効果 現代日本の社会心理と感情 中央研究院人文社会科学研究中心 pp.77-95.

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

樋口 匡貴 (HIGUCHI, Masataka)

上智大学・総合人間科学部・准教授

研究者番号：60352093

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

中村菜々子 (NAKAMURA, Nanako)

兵庫教育大学・発達心理臨床研究センタ

ー・准教授

研究者番号：80350437